

平成 28 年度新潟大学 COC+ 社会人学び直し WG 高度実践看護師等育成事業シンポジウム 地域看護専門看護師が地域保健活動の活性化に 果たす役割とその活用

社会人学び直し WG 「高度実践看護師等育成事業」では、社会人の学び直しの機会を提供し、新潟県における高度実践看護師等の地域包括ケアを担う保健医療人材の育成と定着化を図るとともに、雇用の創出や拡大を目的に、高度実践看護師等の啓発普及、人材育成プログラムの検討・開発等を行っています。今回、地域保健活動の活性化や保健師の質向上のために、スペシャリストである地域看護専門看護師の活動を啓発し、地域における看護人材育成のあり方を検討することを目的にシンポジウムを開催しましたのでその概要を報告します。

1. 目的 地域看護専門看護師(地域看護 CNS)の活動の啓発を図るとともに、地域における看護人材育成のあり方を検討し、地域保健活動の活性化や保健師の質向上を図る。
2. 日時 平成 28 年 12 月 17 日(土) 10 時 30 分～12 時 30 分
3. 場所 新潟大学医学部保健学科 B41 講義室

4. 内容

座長 新潟大学大学院保健学研究科 教授 小林恵子 氏

1) 地域看護 CNS 実践者の立場から

群馬県大泉町健康づくり課	保健師(地域看護 CNS)	持田 恵理 氏
新潟県上越市健康づくり推進課	保健師(地域看護 CNS)	小林奈緒子 氏
新潟県人事課健康管理室	主任(地域看護 CNS)	室岡 真樹 氏

2) 新潟県保健師人材育成担当課の立場から

新潟県医師・看護職員確保対策課 看護職員確保・育成係 副参事 相馬 幸恵 氏

3) 質疑応答・ディスカッション

4) 情報提供 『地域看護 CNS の教育内容と新潟大学大学院地域看護 CNS コースの紹介』

5. 実施体制

主催：新潟大学大学院保健学研究科 (担当者 小林恵子 齋藤智子 成田太一)

共催：新潟県 公益社団法人新潟県看護協会 全国保健師長会新潟県支部 新潟県職員保健師会

後援：全国保健師長会新潟市支部

6. 参加者

参加者：57 名(県庁・県保健所 10 名、新潟市 12 名、市町村 11 名、新潟大学 18 名、看護系大学 3 名、新潟県看護協会 1 名、その他 2 名)



7. シンポジウム概要

＜開催趣旨＞ 座長

○新潟大学大学院保健学研究科 教授 小林恵子

自治体で活動する保健師には、複雑化する保健医療福祉ニーズへの対応、効率的・効果的な保健福祉施策の展開、地域包括ケアシステムの構築など多様かつ高い専門性が求められています。地域看護 CNS は、これらの課題への対応や人材育成等に寄与する高い実践能力をもつ保健師として活躍が期待されています。

高度実践看護師教育課程とは日本看護系大学協議会がグローバル水準の高度実践看護師育成のための看護系大学の修士課程・博士前期課程を専門看護師およびナースプラティクショナーのコースについて認定している教育課程のことです。地域看護専門看護師（地域看護 CNS）38 単位の教育課程を有する大学院は日本国内で新潟大学を含め 2 大学院のみです。全国の CNS 登録数は 1,694 名で 11 の専門分野別にみると地域看護 CNS は 25 名と最も少ない（2016. 5. 27 現在）状況です。新潟県では現在 2 名の地域看護 CNS が行政分野の保健師として活動していますが、活動の実態や役割について、保健師および職場からも十分認知されているとは言い難い状況です。

今回紹介する地域看護 CNS の活動は高度な実践内容はもとより、思考枠組みや実践例はジェネラリストとしての保健師にとっても、実践の可視化、エビデンスの明確化、人材育成の方法などに有用な示唆を与えてくれるものと考えます。

本シンポジウムをとおして、保健師の地域看護 CNS の役割理解と関心を高め、地域看護 CNS の養成を促進するとともに、地域看護 CNS が自治体で活動する基盤づくりを図っていきたいと考えます。



＜地域看護 CNS 実践者の立場から＞

○群馬県大泉町健康づくり課 地域看護専門看護師 持田恵理 氏

現在の公衆衛生看護を取り巻く現状は、対応する課題が複雑かつ多様化する中で、高度な実践能力が求められている一方で、保健師は目の前の業務に忙殺され、住民と向き合う時間の減少、成果が実感できないことにより、疲労の蓄積、やりがいの減退など悪循環に陥っているように感じます。地域看護 CNS の取得によって、自身の実践能力や意欲が向上すると同時に、周囲に対するロールモデルや資源化につながることで好影響を与え、ひいては組織内外の保健師に対する評価の向上につながっています。

専門看護師（以下、CNS）は、個人や家族、集団に対して直接的に行う実践、支援者に対する教育や相談（コンサルテーション）、連携（コーディネーション）、倫理調整、研究といった 6 つの機能（役割）を果たすことが求められています。

それぞれの機能（役割）は、所属で求められた保健活動から切り離されたものではなく、通常の業務の中から課題を抽出し、その課題を解決するために、適切な方略や役割を選択し、保健活動に CNS の役割を付加しながら、実践を行っています。CNS だからといって特別なことを行っているわけではありません。成果が得られる保健活動の実践になるよう心がけています。今回は、CNS の役割のひとつであるコンサルテーションの事例を紹介します。この事例は、施設職員に対して処遇困難なケースを中心としたコンサルテーションを行ったものです。このコンサルテーションのプロセスを

通して、CNSとしての視点や支援で意図したこと、何を目指したのかなど、CNSの思考や行動を解説します。

「自立したい」という発言と実際の行動が一致せず、リハビリにも拒否的態度を示す対象者への対応に職員が苦慮していた事例でした。私は事例検討等を通し4回のコンサルテーションを実施しました。事例検討を行う中で、対象者と職員の抱える問題を整理し、対象者の示す言動の意味とそれを捉える職員の認識のズレがあると考え、調整していきました。また、対象者の言動から認知症の可能性も考慮し、医療機関と連携した対応の必要性を示しました。これらを踏まえ職員とともに対応策を検討しました。この成果として、職員の対象者に対する捉え方の意識変革が図られるとともに、施設内での共通認識に基づく支援計画ができたことで支援意欲も向上しました。このコンサルテーションは、CNSの持つ高度な実践や倫理調整、教育といった機能を組み合わせて発揮しながら実施したものです。CNSは、問題そのものの解決だけでなく、そのプロセスを通して支援者の能力の向上も意図した関わりをしています。

現場を変えていくのは保健師自身。私は現場にこだわり、CNSとして保健師の活動をよりよいものとしていきたいと思っています。



○新潟県上越市健康づくり推進課 地域看護専門看護師 小林奈緒子 氏

私が地域看護CNSを目指して大学院に入学するに至ったのは、経験年数は6年が過ぎ、様々な経験知も得られていましたが「なんとなく保健師活動に自信が持てない」「業務はこなせている実感もあるが不安が残る」といった思いからでした。大学院で学ぶことで今後の保健師活動に自信が持てるのかもしれないというのがきっかけでした。

このような実態からのスタートでしたが、CNS専門実習を行う中で「意図」「根拠」の重要性にあらためて気づかされました。これまでの保健師活動では、自分自身の価値観や経験知から判断していたことが多くありました。結果として提供される看護が同じであったとしても、そこに至る過程はとても重要です。今回、専門実習の中でも新任期保健師に対する研修の企画に取り組んだ経験から得られた学びについてお伝えしたいと思います。1~2年目の保健師の悩みとして「個から集団への活動のつながりがわからない」という声をもとに、研修で使用する資料の考案をすることになりました。最初はそれを表面的に課題として捉え、どんな資料化が必要か、とすぐに実行に向かおうとしました。しかし、「それを課題とする根拠は何か、その研修でどんな効果が得られるのか」という疑問を投げかけられました。そこで新任期保健師の実態調査と先行研究等からの知見や課題を整理・分析し、課題の根拠と解決の方向性を明確化し、研修会の資料づくりにつなげました（これは「新任期における保健師育成の手引（新潟県福祉保健部福祉保健課 平成22年3月として活用）。このプロセスから当事者の声をベースとしながら、その根拠を明確にし、計画・実践に取り組むことの重要性を学びました。

現在、CNSの役割を職場で活かせるよう自己研鑽を続けている段階ですが、倫理的課題に気づき調整する場面は非常に多くなりました。倫理と聞くと、生命倫理など壮大なテーマを思い浮かべ

る方が多いかもしれませんが、実際には「自身の生活をどう選択するか。」という地域看護の現場で出会う事例が多くあります。その中で、個人と家族、個人と支援者の間でそれぞれが重要に思う事（＝価値）が対立していることがあり、それが問題の本質であったという場合もあります。実践例として、ケアマネジャー等から在宅介護サービス利用の調整の依頼があった事例を紹介します。介護者の不適切な介護や支援者への暴言、要介護者の体調悪化があり、在宅介護は限界があるとして、入院、施設利用が必要と考える支援者に対し、本人・家族はその必要性を感じず、サービスに結びつかない事例でした。そこで私は、本人・家族と支援者が各々どのような価値に基づいて行動しているのかを整理、分析することによって対立している価値を明らかにし、その調整を行いました。支援者は本人の思いを大切にしたいと思いつつも、支援者自身の価値観や経験知に基づいた行動をとりやすい傾向があります。対応困難な事例については明確な答えができるものではありませんが、支援者が根拠をもって対応ができるように調整することが重要と考えています。



○新潟県人事課健康管理室 地域看護専門看護師 室岡真樹 氏

私は平成12年に新潟県に採用され、当時の十日町保健所を新任地とし、その後、いくつかの地域機関で地域保健活動を経験してきました。今から6年前、県で実施している研修で大学院の「CNSコース」について講師から紹介され、是非入学したいとすぐに受験手続きをしたことが今に至るきっかけでした。その頃は採用から10年経過し、生活や仕事の変化が目まぐるしく、今後の保健師としてのキャリアをどう重ねていくのか悩んでいた時期でした。無事に入学し、2年目から本格的な実習が始まり、県内外の実習地で指導者の方々の御協力を得ながら学びを深めていきました。同時に必要な単位の取得や修了に向けた課題研究の実施等、日々の業務と平行しながら、多くの方のサポートを得ながら、無事に修了することができました。

CNSコースでは、講義・実習・研究等をとおり、CNSの6つの役割を見る・聞くだけでなく、体験しながら、気づき、失敗も経験し、自分自身の課題に何度も直面しました。しかしこのことが、この先の活動をどう組み立てるのか、それを実践するために自分自身に何が必要なのかを考え、実践を変えるきっかけになり、成果も見えました。特に自分自身の活動を変えることに繋がったのは「何を意図（前提）してその言葉を発したのか、実践したのか」ということを意識することがいかに重要かに気づけたことでした。保健師として成長するためには「振り返り」と自分自身が無意識に持っている「前提」に気づくことが必要で、「前提」を知っていることでその後の展開を大きく変える可能性があると言われていました。CNSコースでの学びは、悩んでいた自分を変えるきっかけとなり、自分自身の成長につながったと考えています。根拠と意図を持つことは自分の活動への自信になり、新しい取り組みへのチャレンジにもつながります。また、それが他者に対しても説得力のあるものとして受け入れてもらうことができ、保健師が楽しいと思えるようになりました。

現在は、県庁の健康管理室で、産業保健師として活動している日々で、対象者あるいは組織と向き合い「保健師」としてどうあるべきかを考えるとともに、若手や同世代の保健師を中心とした自主勉強会の企画・実施や研究活動などにも取り組んでいます。今後はさらに実践を積み、県に所属

する地域看護 CNS として、どのような活動ができるのかを模索していきたくて考えています。

保健師として「変わりたい」と思った時がチャンスです。できるかわからないからやめようではなく、できるかわからないけどやってみましょう。今日のシンポジウムが皆さんの一歩でも踏み出すきっかけになればうれしいです。



<新潟県保健師人材育成担当課の立場から>

○新潟県医師・看護職員確保対策課 副参事（保健師） 相馬幸恵 氏

自治体で働く保健師の活動は、その時代背景やニーズに応じて変化しており、健康課題も生活習慣病、介護予防、感染症対策、児童虐待や自殺対策、災害支援等、常に新たなかつ多様化する健康課題が積み重なり、地域での包括的なケア体制の構築が求められています。

新潟県では県の保健師研修体系に基づき人材育成を行っていますが、各自治体においては分散配置や業務担当制の増加、大学等の教育カリキュラムや社会人経験のある様々な背景を持った新人の採用等により所属における人材育成が難しい現状があります。また、日々の業務に追われ、自治体保健師が自信を持って達成感のある活動を行うことが難しくなっていると感じています。

このような中、保健師が根拠に基づく活動実践を行い、協働する地域住民や関係者に活動の「見える化」していくことで、地域住民等から信頼され保健師のモチベーションがあがるとともに活動の質も高まっていくのではないかと考えています。そのためにも6つの能力をもつ地域看護 CNS の存在や活動は不可欠ではないかと考えます。

新潟県としても、平成28年3月に厚生労働省から示された「保健師に係る研修のあり方等に関する検討会最終とりまとめ～自治体保健師の人材育成体制構築の推進に向けて～」をもとに、現在、新たな人材育成体系のガイドラインの策定を行っているところです。保健師の人材育成にあたっては、管理者、統括保健師、中堅保健師、プリセプター、新人保健師等が各々の立場で人材育成に主体的に関わる役割があることを認識するとともに、組織として人材育成に取り組むことが重要だと考えます。また、保健師人材育成の体系として、地域看護 CNS も連携・協働する人材の一つとして位置づけ、OJT、Off-JTの双方において、その力を発揮していただきたいと思えます。

また、本日シンポジウムに参加して、CNSの皆さんの具体的な実践をお聞きし、私自身もCNSに関する理解が深まりましたし、地域看護 CNS には後輩や同僚保健師の教育、保健師の専門性を明確化するための研究、高度実践事例の紹介や困難事例のコンサルテーションなど、期待できる場所は大きいと思えました。CNSの皆さんには、地域看護 CNS の役割、活動、強みをもっと情報発信してほしいですし、県としても後押しはしたいと思えます。また今後は、研修会の講師や人材育成に関する委員会への参画等、CNSとの協働する場を作っていきたいと思えます。



8. 会場からの声

(質問)

Q. CNSとして大変良い活動をされていると感じた。市の中でCNSとして、どのように研修などを取り組んでいるのか。

A. 市として個別の支援方法に力を入れている。保健師・栄養士の勉強会を業務の中で月に1回行っている。個別支援だけでなく生活習慣病予防なども含めた活動全体の中でコンサルテーションを行い、CNSの専門性を生かせるように取り組んでいる。

Q. 地域で保健師の自主的な研修会を実施している。出張で研修にCNSに参加してもらうことは可能か。

A. 実際に依頼があり、事例を用いてコンサルテーションの研修を行ったこともある。他にも、県の自主グループに参加するなどしている。

CNSの活動としても、講師として研修会に出ることがCNS更新時に活動実績として評価されるので、CNSを活用してもらえるといいと思う。

(感想)

病院でも、対応困難な患者や家族との関わりについて悩むことが多々ある。地域包括支援センターやケアマネジャーに話しても、期待する相談対応を受けられないことがある。保健師に相談するのも一つの手だと、CNSの話聞いていて気付くことができた。これから地域の保健師さんも活用していきたい。地域生活を考えていく上で病院だけでは対応できないこともあるので、行政・保健師からの対応があると思うと心強いと感じた。



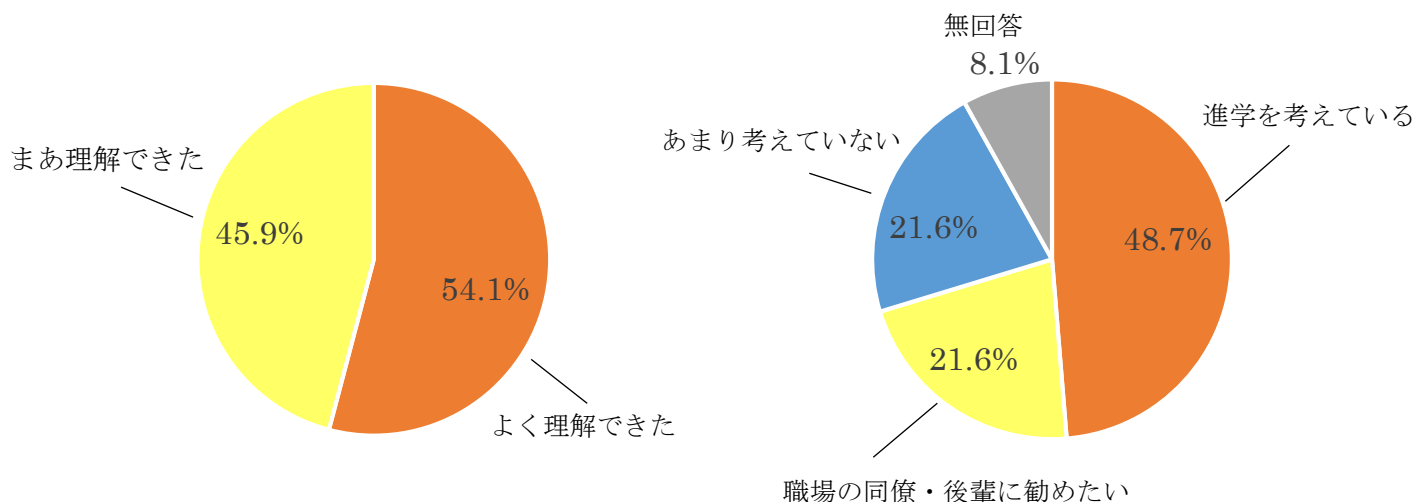
9. アンケート結果（一部抜粋）

1) 参加動機（複数回答）

シンポジウムへ参加した動機は、「CNS の活動に関心がある」27 人（73.0%）、「CNS 教育・大学院教育に関心がある」14 人（37.8%）であった。

2) 地域看護 CNS への理解（n=37）

3) 大学院進学への考え（n=37）



4) 地域看護 CNS を活用したい活動と具体的内容

活動	具体的内容
相談	事業を実施していくなかで、手探りでやっていることがある。“つなぐ方策”“課題の本質”“価値の対立”など、その場に応じた相談に、タイムリーに応じてもらえたらと思った。
	地域の困難ケースの対応について。
教育	県内の保健師の大量退職がせまっている中で、これまでの先輩方の保健師活動伝承のための保健活動の言語化や人材育成にお力をいただきたい。
	現場でのコンサルテーションやコーディネーションなど、保健師一人ひとりの力量アップのための研修への支援。
研究	実践を「見える化」する際、研究的な視点で考え、組み立てるための支援。

5) 全体を通しての感想・意見

（CNS の理解と今後の期待）

- ・ CNS での学びがどう現場で活用されているのか、現場での悩みをどう研究や学びにつなげ深めていったのか、よく理解できた。
- ・ 実際の事例を通して、CNS の活動について伝えてもらい、とても分かりやすかった。

(自身の活動の振り返りと実践への活力)

- ・ 継続開催を強くお願いしたい。明日の活動への力をいただいた。
- ・ なんとなく経験の中で実践してきたものに、根拠を見い出し、活動を振り返りながら日々活動したいと思った。
- ・ 目の前のことをこなすだけで良いのかとモヤモヤしていたところ、CNS の話を聞けてとても良い機会となった。意欲的に保健師活動を行っているモデルを見せていただけたと感じる。

(キャリア形成を考える)

- ・ 地域看護 CNS という存在を何となく知っていたが、本日のシンポジウムを通して CNS の魅力を知り、また今後のキャリアアップとして視野に入れていきたいと思った。
- ・ ラダーが整えられ、県、大学、所属自治体で、CNS コースや大学院への履修をすすめる体制ができることを期待したい。

おわりに

当日は佐渡、糸魚川、南魚沼など遠方から、そして若い方からベテランまで多くの方にご参加いただき大変ありがとうございました。

地域看護 CNS の理にかなった活動を聞き、「腑に落ちた」「元気をいただいた」というたくさんの方の言葉を帰り際にかけていただきました。「今まで様々な研修会に参加してきたがこのような地域看護活動の神髄となる内容を学べる会は初めてだった。もっと早く参加できていたら活動の悩みも克服できたかもしれない。何人かの若い保健師も離職せずに済んだかもしれない」と語られたベテラン保健師さんの言葉が胸に突き刺さりました。

次年度はこれらをさらに発展させた「地域看護 CNS の公開事例検討会」やホームカミングデーに合わせた「若手保健師に向けての対応困難事例の公開コンサルテーション」などを企画しております。

次回も皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(小林 恵子・齋藤 智子・成田 太一)